〔論　文〕

鑑賞授業における比較聴取と言語活動の研究
－「教育音楽　中学・高校版」の分析による－

A Study of the comparison listening and the language activities in Music Appreciation Classes
An Analysis of *Kyoiku* – *Ongaku*

髙田　喜夫
大分県立芸術文化短期大学

Yoshio TAKATA
Oita Prefectural College of Arts and Culture

Ⅰ．はじめに

筆者が担当している「音楽科教育法」の講義において、「鑑賞領域」の指導法に関する学生の質問の多くが「比較聴取」と「言語活動」を取り入れた授業に対するものであった。「比較聴取」をする際の具体的な方法や「比較聴取」が効果的な教材はどのようのものがあるのか、「言語活動」を鑑賞の授業の中で実際にどのように取り入れたら良いのか、といった基礎的な質問から応用にいたる様々な質問が振り返りシート等で見られた。

「比較聴取」とは、複数の音楽例の比較によって、音楽の構成要素の働きとそれによって生み出される表現効果との関係を学習させる、知覚・感受のための指導法[1]のことである。鑑賞の授業においては、生徒一人ひとりが「比較聴取」で知覚・感受したことを、他者の意見を取り入れることにより、さらに深めることができるのである。「他者の意見を取り入れる」ためには、授業の中で言語によるコミュニケーションの場が必要となる。

また、音楽科の授業において、歌唱、器楽、創作などの「表現領域」では、主体的で能動的な学習が行われることが多い。一方、「鑑賞領域」では、生徒は静かに音楽を聴き、教師は鑑賞曲に伴う「知識」を説明するといった受動的な学習が行われることが多かった。「音楽科教育法」を受講している学生の中にも、鑑賞の授業のイメージを聞くと、受動的な授業と回答する学生が少なくない。

このように受動的になりやすい鑑賞の授業で主体的で能動的な学習を行うためには、「言語活動」を伴った授業展開が必要とされている。

以上のことから鑑賞授業における「比較聴取」と「言語活動」を本研究の目的とした。

[1] 日本学校音楽教育実践学会　編「音楽教育実践学事典」音楽之友社 (2017) p. 189

Ⅱ．研究の方法

鑑賞授業における「比較聴取」と「言語活動」の研究をするにあたり、実際の授業がこの２つの観点でどのように行われているのかを幅広く知るために、月刊誌『教育音楽　中学・高校版』（音楽之友社）を主たる資料とし、現行学習指導要領が公示された2012年以降の指導実践例を分析した。

なお、「音楽科教育法」の授業を受講している学生の多くが、ピアノ、声楽、管弦打楽器を専攻しており、西洋音楽を中心に学んでいる。そこで、今回の研究では、西洋音楽の教材を使用した実践例を分析の対象とした。

Ⅲ．授業実践例の分析

１．『教育音楽　中学・高校版』（2012年１月号～2017年９月号）における指導実践例の分析・検討

菅（1999）は『教育音楽　中学・高校版』は、1946年12月に発刊し現在まで継続している雑誌であり、現場への影響力が強く、音楽教育の動向をみることのできるものであるとしている。実際に、数多くの実践例や研究成果が掲載されており、今回の研究に当たり、有効な資料と判断し分析を行った。

表１の通り、諸外国の音楽を取り扱った実践例は38例あり、使用された楽曲は26曲であった。

表１

実　践　例		楽　曲　数	
諸外国の音楽	38	交響曲	1
		管弦楽曲	5
		協奏曲	4
		器楽曲	4
		歌劇	1
		歌曲	2
		ポピュラー音楽	5
		映画音楽	1
		民俗音楽	3
		合計	26

『教育音楽　中学・高校版』
（2012年１月号～2017年９月号）より

今回の研究では、西洋音楽に関する実践例の中から交響曲、協奏曲、管弦楽曲、器楽曲、歌劇、歌曲の６つのジャンルからそれぞれ選曲し分析を行った。

（1）　L. v. ベートーヴェン作曲《交響曲 第５番 ハ短調 作品67》を教材とした実践例

ベートーヴェン作曲《交響曲 第５番 ハ短調 作品67》を教材とした実践例は３件、掲載されていた。内容は以下の通りである。

①　掲載内容

実践例①

掲載号：2015年８月　　**著者**：田原美和
題材名：掲載なし　　**対象年**：第２学年
指導のねらい：
・楽曲構成を理解し、作曲者の思いについて知り、楽曲全体を味わって聴く
指導のながれ：指導計画は全３時間で組まれている。

１時間目は、オーケストラの楽器群ごとに音色の特徴を言葉や図で表すことを行っ

ている。

２時間目では、「運命の動機」について、第１主題と第２主題の曲想や表れ方に注目しながら鑑賞している。

３時間目では、第２、３、４楽章を鑑賞し、音楽と作曲者との思いや意図とのかかわりを考える場を設定している。

実践例②

掲載号：2016年５月　　**著者**：吉田英明

題材名：曲想を感じ取ろう

対象年：第２学年

指導のねらい：

・曲の構成と曲想とのかかわりを理解して、オーケストラの響きを味わい、学んだこと、感じたことを具体的に言葉にして表現する

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、はじめに、知覚と感受とは具体的にどういうことか身近な飲食店での話を例に説明している。その後、音楽を形づくる要素（調性や速度）に着目したイメージ作りを行っている。そして、実際に《交響曲第５番》の第１楽章を鑑賞し、諸要素に着目し、気づいたことを発表させている。またその際、ベートーヴェン自身の性格や生涯等にも触れている。

２時間目では、ソナタ形式の仕組みの理解、反復の効果、様々な形式で書かれた曲の例を見つけ出す活動を行っている。そして、最後に紹介文づくりを行っている。

実践例③

掲載号：2017年４月　　**著者**：阿部みどり

題材名：曲の構成を理解して《運命》を聴こう

対象年：第２学年

指導のねらい：

・音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わう能力を高める

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、導入として、第１楽章の冒頭を聴き、その音を聴いたとおりにオノマトペで表し、ワークシートに記入させている。その際、他の生徒とも意見交流をさせており、他者の意見は、色を変えて記入するよう指示をしている。展開では、第１楽章の第１主題と第２主題を知覚・感受し、さらに、オーケストラで使用される楽器について、DVDを使用し、特徴や音色についてワークシートに記入させている。その後、第１主題と第２主題を、楽器の音色に着目させ、再び鑑賞している。まとめとして、第１楽章を通して聴き、音楽の特徴や曲想をワークシートに記入させている。

２時間目は、曲の構成を理解し、批評文にまとめる活動が行われている。

②　分析

ベートーヴェン作曲《交響曲 第５番 ハ短調 作品67》を教材とした実践例を「比較聴取」の観点から分析してみると、実践例①では、楽曲の構成に着目して、全楽章を「比較聴取」するという場面を設定している。

実践例②では、音楽を文章で表すため（イメージ作り）の方法を説明する場面で、「比較聴取」が行われている。調性を変えたり、速度を変化させたりして演奏し、それぞれからイメージするものを考えさせている。

実践例③では、第１楽章の第１主題と第２主題を曲想という観点から「比較聴取」を行っている。

次に「言語活動」の観点から分析してみると、実践例①では、本時のまとめの中で、ワークシートに書いたことを隣の席の生徒に紹介する場面が設定されている。

実践例②では、実際に掲載されている指導のながれの中では、具体的な「言語活動」の事例は掲載されていないが、授業のポイントという項目の中で、「短時間であっても自分の考えを他者に伝え、また人の考えを聞く時間を取り入れている」と書かれている。

実践例③では、１時間目の導入として、１楽章の冒頭をオノマトペで表し、それをワークシートに記入後、他者と意見交換をさせる場面を設けている。

（２） A. ヴィヴァルディ作曲《和声と創意の試み》第１集《四季》を教材とした実践例

ヴィヴァルディ作曲《和声と創意の試み》第１集《四季》を教材とした実践例は、５件掲載されており、内容は以下の通りである。

① 掲載内容

実践例①

掲載号：2012年10月　　**著者**：丸與直子
題材名：すてきな『春』をプレゼントしよう
対象年：第１学年
指導のねらい：
・弦楽合奏の響きに関心を持ち、鑑賞活動に主体的に取り組む。
・ソネットの情景に気をつけながら、曲想の変化を感じ取る。
指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、はじめに「春」を鑑賞し、第一印象やイメージについて話し合う場を設定している。次に、弦楽器の生演奏や音域表を用いて、弦楽器やチェンバロの音色や特徴を理解させている。最後に、ソネットを手掛かりにイメージしたことを書かせる場面を設定している。

２時間目では、ソネットの内容について、〔共通事項〕を手掛かりとしてグループディスカッションをさせる場面が設定されている。最後に、話し合ったり、感じ取った文章を使ったりして紹介文を作成させている。

実践例②

掲載号：2013年４月　　**著者**：安次里絵
題材名：掲載なし　　**対象年**：第１学年
指導のねらい：
・音楽を形づくっている要素に気づき、曲想とのかかわりの面白さを感じ取ることができる
指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、ヴィヴァルディや活躍した時代背景、バロック時代、弦楽合奏の響きについて学習し、ヴァイオリン属やチェンバロの仕組みについて理解する活動が行われている。

２時間目では、音楽の諸要素を理解させるために、電子ピアノを使用し、調やリズム、音高、強弱、音色などを変えて、「春」を演奏している。その後、５つの場面について、生徒が感じた気分や雰囲気と音楽の諸要素との関係を考えさせる時間を設定し、最後に場面ごとに「感じたこと」、「気づいたこと」をワークシートにまとめる活動を行っている。

実践例③

掲載号：2014年10月　　**著者**：安部文江
題材名：掲載なし　　**対象年**：第１学年

指導のねらい：
・旋律やリズム、音の高低や強弱と曲想との関わりを感じ取り、情景をイメージしながら音楽のよさや美しさを味わって聴く

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、導入として、「春」の冒頭を鑑賞し、使われている楽器を考えさせている。展開として、ソネットと音楽のかかわりを学ぶ場面を設定している。その際、音楽を聴き、それにあったソネットをなぜそう思ったかという根拠とともに、ワークシートに記入させている。その後、答え合わせをし、根拠についての意見交換を行っている。

２時間目も引き続き、ソネットと音楽のかかわりについて学び、最後に、生徒が聴き取った根拠を確かめられるような映像を使って、全曲を通して鑑賞している。

実践例④

掲載号：2015年４月　　**著者**：中常泰彰
題材名：掲載なし　　**対象年**：第１学年
指導のねらい：
・音楽とソネットのかかわりを理解して、曲想や要素とのかかわりを感じ取りながら聴き深める

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目は、「春」の冒頭をCDで鑑賞し、感じたことを他者と交流させている。そして発表させ、板書してクラス全体で共有している。展開では、楽器とその音色について学び、使われている楽器をDVDで鑑賞し、ワークシートに記入させる。次に、ソネットを音読し、冒頭で聴いた部分と、他の部分の違いをグループで話し合わせ、その後、自分の考えとリズムや旋律、音色などが、どのようにかかわっているかを考えながら、鑑賞させている。

２時間目については、旋律の反復や変化に注目させ、リトルネッロ形式など楽曲全体の構造を理解させている。さらに、楽曲の背景に関する知識を聴き深め、価値判断へのアプローチを図り、紹介文を書かせている。

実践例⑤

掲載号：2017年６月　**著者**：望月光祐
題材名：ソネットと音楽のつながりにびっくり！どんどん語りたくなる鑑賞の学習
対象年：第１学年
指導のねらい：
・『春』第一楽章を部分鑑賞し、音楽の要素に着目させながら「ソネット」と音楽とのつながりを考える
・音楽の要素に着目させながら曲を聴き、どのようなソネットがつけられているかを考える

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目は、導入として、「春」の第１楽章を鑑賞し、風景、音色、楽器など、感じたことを学習プリントに書かせている。次に、部分鑑賞を行い、周りの生徒と相談させながら、ソネットと音楽の関連性を明らかにしていく活動を行っている。

２時間目については、他の楽章のソネットについて音楽との関連性を探りながら鑑賞させている。

②　分析

ヴィヴァルディ作曲《和声と創意の試み》第１集《四季》を教材とした実践例を「比較聴取」の観点から分析してみると、実践例②において、音楽を形づくっている諸要素が、音楽にどのような影響を与える

かを理解させるために、電子ピアノを使用し、調やリズム、音高、強弱、音色などを変えるという授業が行われている。他の実践例では、具体的な実践は掲載されていなかった。

次に、「言語活動」の観点から分析してみると、実践例①では、ソネットの内容について、〔共通事項〕を手掛かりとしてグループでディスカッションさせる場面を設定している。その際、「ことばの泉」という〔共通事項〕を具体的な言葉で表現できるようにガイドしたものを使用している。さらに、授業の最後には、話し合ったり、感じ取った文章を使ったりして紹介文を作成する場面を設定している。

実践例②では、２時間目の展開の中で、場面ごとに「感じたこと」、「気づいたこと」をワークシートにまとめ、その後４人グループで一人ずつ発表するという場面を設定している。

実践例③では、ワークシートに書かれたソネットと実際に鑑賞した音楽とを結びつける学習において、どのような根拠でソネットを選んだか発表し合う場面を設定している。

実践例④では、１時間目の導入の場面で、第１楽章の冒頭を聴いて感じたことをワークシートに記入し、そのあと、隣の人と交流し発表する場面を設定している。さらに、ソネットを部分鑑賞し、どのような違いがあるか、自分の考えを周りの人と交流する場面を設定している。また、諸要素を知覚・感受させる際にも交流させる場面を設定している。

実践例⑤では、第１楽章を部分鑑賞した後、ソネットと音楽の関連性を明らかにしていく際に、周りの生徒と相談しながらプリントに記入させる場面を設定している。

（３） B. スメタナ作曲　連作交響詩《我が祖国》より「ブルタバ」を教材とした授業の展開について

スメタナ作曲連作交響詩《我が祖国》より「ブルタバ」を教材とした実践例は、４件[2]掲載されており、内容は以下の通りである。

①　掲載内容

実践例①

掲載号：2013年11月　　**著者**：北添郁郎
題材名：掲載なし　　**対象年**：第１学年
指導のねらい：
・曲にこめられたメッセージを読み取る
指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、曲中の場面をクイズ形式で聴き、各場面を把握する活動が行われ、その後DVDを鑑賞している。

２時間目では、導入として、「ブルタバ」の主題を覚えさせ、キーボードで演奏したり、階名で歌わせたりしている。その後、曲に込められたメッセージを音楽の諸要素をもとに考える場面が設定されている。最後にCDを鑑賞しながら曲に込められた作曲者の思いを想像し、生徒自身が感じた曲のメッセージを書かせている。

実践例②

掲載号：2015年９月　　**著者**：肘井千佳
題材名：掲載なし　　**対象年**：第３学年
指導のねらい：
・それぞれの表題から音楽の特徴を聴き取ることができる
・音楽の特徴が、表題の音楽にどのような

[2]「ブルタバ」について、４件掲載されていたが、そのうちの１件は、２つの観点について特に具体例が示されていなかった為、省略した。

印象を与えているのかを発表する
指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。
１時間目では、時代背景等資料を活用して、作曲者の思いを考えさせている。
２時間目では、それぞれの表題と音楽がどのように結びついているか考える授業が展開されている。その中で、印象に残った表題とその理由を発表させている。

実践例③
掲載号：2017年８月　　**著者**：阿部みどり
題材名：音楽の諸要素と曲想とのかかわりを理解して『ブルタバ』を聴こう
対象年：第２学年
指導のねらい：
・音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴く能力を高める
指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれているが、掲載されているのは、１時間目のみである。
導入として、作曲者の思いや意図、歴史的背景を説明しながら、「ブルタバ」のテーマを理解させている。その後、音や音楽を聴いてどの場面を想像するか考えさせている。その際に音楽の特徴から結び付けるよう指示をしている。また、最初は、個人で聴き取り、そのあと、クラスで共有し、他者の意見は違う色でワークシートに記入させている。最後に、生徒が知覚・感受した音や情景を、CDで確認し、想像した内容をクラスで共有している。

②　分析
スメタナ作曲連作交響詩《我が祖国》より「ブルタバ」を教材とした実践例を「比較聴取」の観点から分析してみると、実践例①では、「ブルタバ」に込められた作曲者のイメージを読み取る学習の中で、主題における調性と速度の変化を教師がピアノで弾き、それを「比較聴取」し、作曲者の思いを読み取っている。
実践例②・③では、「比較聴取」という観点からの具体例は示されていない。
次に、「言語活動」の観点から分析してみると、実践例①では、「ブルタバ」に込められた作曲者のイメージを読み取る学習の中で、教師の発問に対する答えを、３人の生徒で考え、発表するという場面を設定している。
実践例②では、それぞれの表題と音楽がどのように結びついているか考える場面において、印象に残った表題とその理由を発表させている。その際、同じ意見の場合は挙手させるなど、発表に消極的な生徒に対しての配慮がなされている。
実践例③では、音や音楽を聴いてどの場面か想像する活動の中で、まずは個人で聞き取り、その後、クラスで共有している。

（４）　J. S. バッハ作曲《フーガト短調》を教材とした実践例
J. S. バッハが作曲した《フーガト短調》を教材とした実践例は、３件掲載されており内容は以下の通りである。

①　掲載内容
実践例①
掲載号：2013年６月　　**著者**：長者久保希史子
題材名：掲載なし　　**対象年**：第２学年
指導のねらい：
・パイプオルガンの音色や響きを聴き取る
・主題と応答の旋律、聴取・感受した音楽の要素、特質、雰囲気を言葉で伝え合うなどして鑑賞する

指導のながれ：指導計画は全３時間で組まれている。

１時間目では、はじめに、旋律の特徴やパイプオルガンの音色の特徴をメモしながら鑑賞させている。その際、前半部分を繰り返し鑑賞することで、主題と応答の違いを理解させている。その後、フーガの形式を説明し、音楽の特徴や楽器の響きなどに注目しながら中間部・後半部を鑑賞させている。最後に、フーガの形式やパイプオルガンの音色に注目しながら全曲を鑑賞し、新たに気づいたことや考えたことを発表させている。

２時間目では、ベートーヴェン作曲《交響曲第５番》を教材とした鑑賞を行っている。

３時間目では、《フーガト短調》と《交響曲第５番》の２つの教材を用いて、授業を展開している。これは、それぞれの音楽の構造や曲想とのかかわりを理解させ、解釈したり自分なりの価値をもって聴き味わったりすることを目的としている。〔共通事項〕をもとに、２曲を「比較聴取」させ、音楽の特徴や楽器の音色の特徴を確認させながら、それぞれの音楽のどこが良かったのかなどを考えさせている。鑑賞後は、紹介文を書かせ、発表させている。

実践例②

掲載号：2014年10月　　**著者**：近藤京子

題材名：掲載なし　　**対象年**：第２学年

指導のねらい：

・フーガの曲の仕組みを理解させるために、和声的な音楽と多声的な音楽を比較聴取することにより、それぞれの曲のテクスチュアを気づかせる

・知覚・感受したことを応用し『フーガト短調』の特徴を深く聴き取る

指導のながれ：指導計画は全３時間で組まれている。

１時間目では、導入として、「かごめかごめ」を輪唱させている。その後、MIDIで作った和声的な音楽と多声的な音楽を比較聴取させ、「かごめかごめ」と似ていた点を理由とともに発表させている。その後、《フーガト短調》の前半部分を、旋律の動き方、音の高さ、音色の変化という３つの観点について考えながら鑑賞し、気づいたところからワークシートに記入させている。その後、主題と応答を確認させ、フーガの形式を理解させた上で、最後に全曲を通して鑑賞している。

２時間目では、パイプオルガンの仕組みやバッハついての学習、３時間目では、身近にある多声的な作品の紹介文を書かせる活動が行われている。

実践例③

掲載号：2015年６月　　**著者**：田原美和

題材名：掲載なし　　**対象年**：第２学年

指導のねらい：

・パイプオルガンの音色の豊かさ、多声的な声部の重なりの知覚・感受を通して、多声音楽の面白さを知る

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、授業前からJ. S. バッハの他の作品を流し、音色や旋律に興味を持たせる工夫がなされている。展開として、音が出る仕組みと音色特徴をDVDで鑑賞し理解させ、チェンバロやピアノの音色とも比較している。

２時間目では、鍵盤ハーモニカを使用し、主題を演奏するなど、フーガの形式を理解させている。

② 分析

J. S. バッハ作曲《フーガト短調》を教材とした実践例を「比較聴取」の観点から分析してみると、実践例①では、《フーガト短調》とベートーヴェン作曲《交響曲第５番》とを〔共通事項〕を中心とした様々な要素を観点に、「比較聴取」させている。

実践例②では、フーガの形式を理解させる場面で、MIDIで作った和声音楽と多声音楽を「比較聴取」させている。また、第１声部と第２声部を教師がピアノを弾き、相違点を見つけ出す「比較聴取」も行われている。

実践例③では、パイプオルガンの音色と仕組みを理解させるために、ピアノ、チェンバロとの「比較聴取」が行われている。その際、音色や仕組みだけでなく、歴史的背景についても比較している。

次に、「言語活動」の観点から分析してみると、実践例①・②・③の全てにおいて、具体例は示されていなかった。

（５） G. ヴェルディ作曲歌劇《アイーダ》を教材とした実践例

ヴェルディが作曲した歌劇《アイーダ》を教材とした実践例は、２件掲載されており内容は以下の通りである。

① 掲載内容

実践例①

掲載号：2017年１月　　**著者**：佐藤太一

題材名：オペラの魅力を味わおう

対象年：第３学年

指導のねらい：

・オペラ『アイーダ』の音楽の声の音色、旋律、テクスチュア、強弱を知覚・感受しながら、楽曲の構造と曲想とのかかわりを理解し、オペラのよさや魅力を味わう

指導のながれ：指導計画は全３時間で組まれている。

１時間目では、オペラの音楽について、独唱、重唱、合唱などを聴かせ、それぞれの特徴やよさを考えさせている。

２時間目では、「凱旋の場」を字幕なしの映像で鑑賞させ、声の音色や表現、表情などから場面を考えさせている。さらに、音楽を根拠に、それぞれの登場人物の関係性を考えさせている。次に、総合芸術としてのオペラを美術・演出などの様々な視点、音楽と他の芸術などとの関連性、音楽がオペラの中で果たす役割や意味などを考えさせている。

３時間目では、全幕をダイジェスト版で鑑賞させ、オペラのよさや魅力をさらに深める学習が行われている。

実践例②

掲載号：2017年２月　　**著者**：吉田英明

題材名：掲載なし　　**対象年**：第２学年

指導のねらい：

・オペラに親しみをもち、音楽を味わいながら聴き、文化や歴史、その他の芸術とのかかわりを学ぶ

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれているが、２時間目の内容について掲載されていない。

１時間目では、最初にオペラについて思いつくことを隣同士で相談させている。次に、音楽の諸要素を見つけるように指示し、DVDを鑑賞させている。その後、見つけた諸要素を発表させている。音楽以外の要素についても説明をしている。そして、オペラの諸要素を理解させた後で、歌がオペラの中で果たす役割、相関図を示した上で、各登場人物がどの声種なのか、ソロと重唱や合唱、アリアとレチタティーボについて、ストーリーとの関連性など、根拠を

示しながら考えさせている。最後に、２幕２場を全部鑑賞させ、紹介文を書かせている。

② 分析

ヴェルディ作曲歌劇《アイーダ》を教材とした実践例を「比較聴取」の観点から分析してみると、実践例①では、オペラの音楽的特徴を学習する際に、様々なオペラの中から、独唱、重唱、合唱などを鑑賞させている。また、「凱旋の場」に登場する人物をそれぞれ、音色という観点で「比較聴取」し、関係性を考えさせている。

実践例②では、具体的な例は示されていない。

次に、「言語活動」という観点から分析してみると、実践例①では、具体的な例は示されていない。

実践例②では、授業のはじめに、雑談タイムとしてオペラに関して思いつくことを隣同士の生徒と話し合う場面が設定されている。

（６） F. シューベルト作曲《魔王》を教材とした実践例

シューベルトが作曲した《魔王》を教材とした実践例は、５件[3]掲載されており内容は以下の通りである。

① 掲載内容

実践例①

掲載号：2013年７月　　**著者**：安次里絵

題材名：掲載なし　　**対象年**：第１学年

指導のねらい：

・音楽を形づくっている要素に気づき、詩と伴奏と歌のかかわりの一体感がつくりだす楽曲の豊かさを感じ取る

指導のながれ：指導計画は全３時間で組まれている。

１時間目では、はじめに原語で鑑賞している。３人の登場人物をあらかじめカードで示し、曲の中で「Erlkönig」、「Vater」、「Sohn」の３つのドイツ語が聴こえたら挙手する活動を入れている。原語で鑑賞した後に、教師が日本語で朗読をしている。

２時間目では、歌い方の特徴とピアノ伴奏の感じについて、まず、個人でワークシートに記入させ、その後グループで話し合いをさせている。グループでの話し合いの際に、必ず全員が発言するルールや自分の考えと他者の考えを色分けして書かせる工夫がなされている。最後に、グループごとに発表させている。

３時間目では、まとめの学習が行われる。

実践例②

掲載号：2014年６月　　**著者**：安倍文江

題材名：掲載なし　　**対象年**：第１学年

指導のねらい：

・登場人物による旋律の雰囲気や歌い方の違いを感じ取ったり、場面ごとの変化を聴き比べたりすることで、詩と音楽が一体となって作り出される魅力を味わうことができる

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、導入として、原語で鑑賞し、言葉の雰囲気や音楽特徴から詩の内容を想像する場面が設定されている。その後、音楽を聴いて想像したストーリーを書

[3] 「魔王」については、５つの実践例が掲載されていたが、そのうち１件は、２つの観点について具体例が示されていなかった為、省略した。

かせている。作曲者や作詞者の肖像画と、曲名や課題などを書いたカードを準備し視覚的に情報を与え、記憶の定着や課題把握する工夫がなされている。ワークシート記入後は、隣同士で発表している。そしてDVDを字幕付きで鑑賞し、ストーリーを把握させ、その後、詩を朗読し、音楽と詩の関連性を考えさせている。次に、登場人物ごとの旋律の雰囲気や歌い方の特徴を聴きわけ、言葉で表し、ワークシートにまとめさせている。そのあと、全体で共有し、最後に、音楽を聴いて、登場人物の聴きわけを行っている。

２時間目では、登場人物ごと、登場する場面ごとに音の高さや音色、強弱の変化を聴き取らせている。

実践例③

掲載号：2016年７月　　**著者**：石田浩紀

題材名：自分たちの「魔王」をプロデュースしよう！

対象年：第１学年

指導のねらい：

・CDを聴き比べて、それぞれの役の特徴を自分たちで探る

・特徴をある程度つかんだ上で、さらに聴き比べ、自分たちで歌ってみてつくりたいイメージをまとめる

指導のながれ：指導計画は全２時間で組まれている。

１時間目では、はじめにCDを聴き、歌手が何人の登場人物を歌い分けているかを考えさせている。その後、登場人物の音楽的特徴をグループごとに協力し発見させている。さらに、登場人物のキャラクターを音楽や歌詞から考えさせる場面を設定している。

２時間目では、登場人物ごとにグループに別れ、どのように歌いたいか（演じたいか）を話し合う場面が設定されている。その後、生徒のイメージする登場人物を教師が歌い（演じ）、実際に細部まで再現されているかを検証していく授業が展開されている。

実践例④

掲載号：2017年９月　　**著書**：望月光祐

題材名：詩に合わせた曲想の変化を捉えて鑑賞しよう

対象年：第１学年

指導のねらい：

・『魔王』を聴き、曲からイメージできることと音楽の要素を聴き取り、記述する

・「伴奏」「子」「魔王」を取り出して聴き、曲の進行とともに音楽の要素や感じがどう変化していくかを感じ取り、学習カードに記述し発表し合う

指導のながれ：指導計画は全３時間で組まれている。

１時間目では、作曲者や物語の内容についての学習が行われている。

２時間目では、「伴奏」、「子」、「魔王」を部分鑑賞し、気づいたことを発表し合う活動が行われている。そして、要素の変化を感じ取りながら再度《魔王》を鑑賞している。

３時間目では、《魔王》のよさを伝える紹介文を書く活動が行われている。

②　分析

シューベルトが作曲した《魔王》を教材とした実践例を「比較聴取」の観点から分析してみると、実践例①では、具体的な例は示されていなかった。

実践例②では、歌手の歌い方の特徴を「比較聴取」し、登場人物の台詞を聞きわける場面を設定している。さらに、登場人物ごとに「比較聴取」を行い、旋律の雰囲

気や歌い方の特徴をワークシートに記入させている。

実践例③では、登場人物をどのように歌いたいか（演じたいか）を考える活動が設定されており、その際に、様々な演奏家のCDを比較鑑賞させている。

実践例④では、登場人物ごとに「比較聴取」を行い、気づいたことを学習カードに記入させる場面を設定している。

次に「言語活動」の観点から分析してみると、実践例①では、歌い方の特徴とピアノ伴奏の感じについて、個人でまとめ、そのあと、４人グループでお互いの考えを共有する場面が設定されている。さらに、グループ内で役割を決め、順番に誰もが自分の考えを述べるというルールが作られている。そして、グループ内で意見をまとめ、クラス全体で共有する活動も行われている。

実践例②では、旋律の雰囲気や歌い方の特徴を個人でワークシートに記入させ、全体で共有する場面が設定されている。

実践例③では、登場人物の音楽的特徴をグループで話し合う場面が設定されている。さらに、歌詞や音楽的特徴から登場人物のキャラクターをグループで考える場面も設定されている。そして、登場人物をどのように歌いたいか（演じたいか）という活動では、グループで朗読したり、CDを鑑賞したりして考え、楽譜に書き込ませている。

実践例④では、登場人物ごと部分鑑賞を行い、気づいたことを発表し合う場面が設定されている。

Ⅳ.「比較聴取」と「言語活動」を取り入れた授業の方向性と今後の課題

今回の分析から、鑑賞授業において「比較聴取」と「言語活動」が、実際の教育現場でどのように行われているか、知ることができた。

１．「比較聴取」を取り入れた授業の方向性と今後の課題

「比較聴取」を取り入れた授業に関しては、音楽を構成している諸要素（音色、速度、旋律、テクスチュア、形式、構成など）の取り扱い方に注目して整理してみると、諸要素を一つに絞って取り扱ったものと複数の要素を同時に取り扱ったものが見られた。また、主教材となる楽曲の中から比較する諸要素を取り出したものと、他教材の諸要素を用いて比較している授業が見られた。

今回分析を行った授業のうち、ベートーヴェンの《交響曲第５番ハ短調》やJ. S. バッハの《フーガト短調》、シューベルトの《魔王》を教材とした授業では、「比較聴取」が多く取り入れられていた。一方で、ヴィヴァルディの《四季》やスメタナの「ブルタバ」ではあまり実践例が見られなかった。これは、中学生にとって諸要素が比較しやすい楽曲であるかどうかということが要因の１つに考えられる。

ベートーヴェンやバッハの作品は、音色、旋律、テクスチュア、形式などの要素が明確であり、比較しやすい。しかし、ヴィヴァルディやスメタナの作品は、中学生にとって比較しやすい諸要素が少ない。少ないがゆえに、焦点化しやいという利点もある。例えば、鑑賞授業の初期段階で、「比較聴取」の導入として使用することが有効だと考えられる。具体的には、《四季》では、弦楽器と通奏低音という編成で演奏されているため音色はオーケストラの作品より統一されている。そこで音色に焦点をあてるのではなく、旋律に着目させて比較鑑賞させ、ソネットとの音楽とのかかわりを学習することが可能である。《四

季》での学習を踏まえて、「ブルタバ」ではさらに発展させ、弦楽器、特にヴァイオリンの音色に着目させ、場面ごとにどのような旋律を弾いているか「比較聴取」させる。

以上のように、諸要素が少ないということは、言い換えれば焦点化しやすく、生徒にとって鑑賞する際の着目点を明確化できるともいえる。このような「比較聴取」を初期の段階で実施した上で、さらにより多くの要素を取り上げて「比較聴取」させていくことで、知覚・感受を深めることになる。

次に、実際に「比較聴取」する際の鑑賞の方法であるが、CDやDVDを使用した実践例がほとんどであった。中には、実際に教師が演奏して比較している実践例もあった。

現在、使用されている指導者用のCDでは、場面ごとにトラック付けがなされている。しかし、「比較聴取」するにあたり、さらに細かいトラック付けや他の音源の準備が必要となってくる。実際には、音色に着目し「比較聴取」をする際、単独で旋律を演奏しているCDなどはなかなか手に入らない。最近ではオーケストラの旋律を単独で演奏しているCDなども販売はされているが、実際に教材として使う楽曲があるとは限らない。また、必要としている旋律ではないことがほとんどである。現状としては、電子楽器（電子ピアノやシンセサイザー）を使用するか、パソコンでMIDI音源を作成し、実際の楽器に近い音色で鑑賞するくらいである。また、音楽大学で学ぶ学生であれば、実際に友人に演奏してもらい録音をするということも可能であるかもしれないが、難しいことのように思う。

「比較聴取」に関して、今回の分析から見えてきた今後の課題としては、教員を目指す学生に対して、「比較聴取」をするための楽曲分析（アナリーゼ）能力の育成が考えられる。また、発達段階に応じた「比較聴取」の方法や諸要素の配列化（システム化）も探求しなければならない。さらに、音源を編集する作業の方法や音源収集といったことに関しても、学生に指導していく必要がある。

２．「言語活動」を取り入れた授業の方向性と今後の課題

「言語活動」に関しては、多くの実践例で取り上げられていた方法として、まず、個人で考えをまとめ、ワークシート等に記入した後、グループになって意見交流を行う方法である。グループ活動だけでなく、その後、クラス全体へ共有するという方法や、最初からグループになり、教師に対する発問を考えたり、楽曲に対するイメージや印象を話しあったりする方法も見られた。グループでの活動の際には、必ず全員が発言するようなルールを設定したり、話し合いが活性化しやすいよう資料を提示したりする方法も見られた。「言語活動」を取り入れるタイミングについては、導入、展開、まとめ、全ての場面で見られた。

「言語活動」に関して、今回の分析から見えてきた今後の課題としては、「言語活動」のねらいと方法を体系化することが必要と考える。音楽は他の教科と違い、明確な答えがあるわけではない。他者の意見を取り入れ、より深い知覚・感受のための「言語活動」の方法を考えなければならない。本学の学生が行った模擬授業の際にグループ活動を行う場面を設定したが、目的が明確化されていない場合、ただの雑談になっている等が見られた。

知識は教えることができるが、感性を教えることは困難である。しかし、意見交流

を活性化させることにより、多くの気づきをすることができる。気づきにより生徒自ら感性を磨くことができる。このことを前提に、楽曲理解のための諸要素の焦点化、システム化、多様な言語活動の方法などを体系化する必要がある。

Ⅳ．おわりに

今回の研究では、『教育音楽　中学・高校版』に掲載されている鑑賞授業の実践例を「比較聴取」と「言語活動」の２つの観点から分析を行った。その中で、様々な実践が行われており、今後の課題も多く見つかった。さらに、日本の伝統音楽に関する授業での「比較聴取」と「言語活動」を取り入れた授業展開を考える必要がある。

筆者が担当している「音楽科教育法」を通して、生徒たちが、多種多様な音楽に触れ、個人の音楽観が拡大されるような授業を計画し指導ができる学生の育成を目指していきたい。

参考文献一覧

文部科学省「学習指導要領解説　音楽編」教育芸術社(2008)

日本学校音楽教育実践学会　編
「音楽教育実践学事典」音楽之友社(2017)

「教育音楽　中学・高校版」音楽之友社
第56巻，第１号，- 第61巻，第９号，(2012.1-2017.9)

今 由佳里
「音楽鑑賞教育に関する基礎的研究」
『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』
第65巻，p. 49-54，(2014)

菅　道子
「戦後改革期における音楽科の学習構成の展開
―雑誌『教育音楽』の内容分析を中心として―」
日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』
第 25 巻，p. 119-127，(1999)

衛藤　晶子・小島　律子
「音楽授業において知覚・感受を育てる方法論としての比較聴取 - 表現の授業の場合 - 」
『大阪教育大学紀要　第Ⅴ部門』
第54巻, 第２号，(2006)

日吉 武・山﨑 浩隆
「比較聴取による音楽鑑賞の授業構成 ：分析的な聴取から鑑賞への発展過程に注目して」
『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』
第６巻，第１号，(2012)

安藤 江里
「能動的な音楽鑑賞学習の実践的研究 ：教員養成の場合」
『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』
第16号，p. 117-130，(2016)